

16. 《浅間山噴火により武士勢力図が激変》

1108年（天仁元）、浅間山が大噴火。天明の大飢饉を起こした大噴火（1783年（天明））より大きな規模でした。（注1） この噴火物は、群馬県・栃木県の広範囲に激甚な面的被害を与え、また利根川に流出してその河床を著しく上昇させ、武蔵国の低湿地に氾濫堆積を繰り返したと考えます。

この復興により、群馬県を拠点とする新田氏は、復興を兼ねて広大な荘園を造成しました。また栃木県を拠点とする足利氏の荘園も、河床上昇に伴う取水水位が上昇して灌漑面積を拡大したと推察します。

こうして新田氏、足利氏の領地が拡大し、周辺の武士を従えて強大な武士団を形成していきます。彼らは、武士のレジェンド八幡太郎義家（源義家：清和源氏）の孫であり、坂東武士団のまとめ役としてふさわしかったからです。

なお、武蔵国では、低湿地の利根川下流域（埼玉県：注2）が氾濫堆積により、標高が高くなって容易に開墾地を増やせたと考えます。そして、武蔵国氷川神社のランクが一の宮に格上げになったように、多摩川筋よりも利根川筋（埼玉県）が勢力を増したと考えます。

しかし武蔵国では、群を抜いた武士が登場せず、強大な武士団を編成するには至りませんでした。平安初期の富士山噴火（注3）と平安後期の浅間山噴火は、武蔵国周辺に強力な武士団形成を促し、武蔵国は、周辺国の緩衝地域に甘んじることになったと考えます。

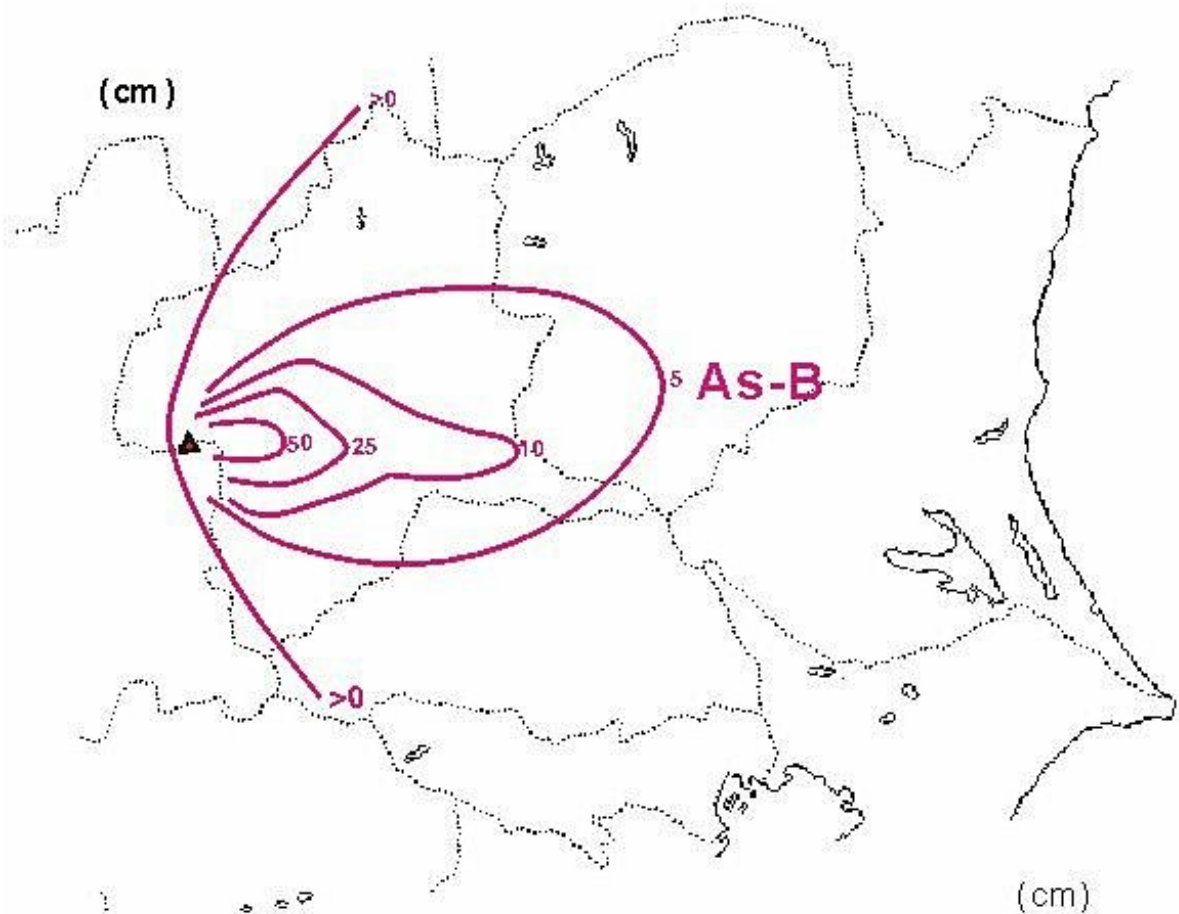
注1：マグマ噴出量は 0.62 DRE km³ で、火山爆発指数は、”非常に大規模”とランクされる VEI 5 でした。なお 1128 年（大治 3）にも噴火し、そのときのマグマ噴出量は 0.28 DRE km³、火山爆発指数は、VEI 4。

注2：昔、利根川は、今の隅田川に流れ込んでいました。ですから、埼玉県は利根川下流域になります。現在のように銚子に流れるように付け替えられるのは、江戸時代です。

注3：富士山は、800 年、864 年に噴火。「水土の豆知識 133」を参照してください。

写真は、①浅間山噴火の降灰分布（天仁噴火に伴う浅間 B テフラの分布（町田・新井 2003、新編火山灰アトラスより）を、細見が関東白図にレイヤー）、②新田荘と足利荘の概略位置（y a h o o 地図に細見が加筆）

①



②

